

2009年2月28日開催 RISS/IR3S/SDC シンポジウム

「持続可能なデザインとは」ー環境、安全安心、人や伝統からのアプローチー
～More with less; A Transition toward Sustainable Design～

文責：末永恵(大阪大学サステナビリティ・サイエンス研究機構 特任准教授)

【シンポジウム概要】

デザインの視点で持続可能な地域社会のあり方を考える動きは、重要だが新しい分野です。その中で注目されているのがサステイナブル・デザインというものです。単なる技術やエネルギーだけでなく都市や歴史・伝統を視野に入れて、環境やサステナビリティ（持続可能性）の諸問題の必要性を追求するもので、21世紀の課題はこのサステイナブル・デザインを通して、多分野・異分野の知恵や考え方を統合することにあるといわれています。本シンポジウムでは、持続可能社会の鍵を握るといわれるデザインの視点からサステナビリティを考えます。

【基調講演】「アート&デザイン：持続可能な世界の構築に向かって」



南條 史生 森美術館館長

講演要旨)

アートは環境問題の課題や問題を喚起することを可能にし、「環境問題は文化の問題」であると主張。自然の素材やリサイクルした材料で作られた芸術品や建築、あるいは環境汚染、地球温暖化など環境をエコロジーとし、環境に対する警笛を鳴らそうとするものの国内外の例を紹介。エコカーなどで機能一辺倒でない「最高のデザイン」を投与させることがエコの認識を高め、普及させることにもつながると説いた。結果、デザインが淘汰されない商品は長く使われ、結果的に環境への負荷を減らすことができることから、「デザインの持続可能性」を追求すべきと提案した。

【招待講演】「Honda Design—モビリティの新しい価値創造に向けて—」



海老澤 伸樹 株式会社本田技術研究所常務執行役員

講演要旨)

自動車の抱える問題を提示し、その中で求められるデザインの果たす役割について講演。今後、特に、アジアを中心に自動車の増加が見られ、世界的に広がる環境問題への対処が急務となっている自動車業界の現状を紹介。同社が世界で初めて環境対策のマスクー法をクリアした事例を紹介し、今後、多様化するエネルギーを効率よく活用する技術が必要になってくると強調。その中で、CO₂削減技術は、ガソリンエンジンの効率アップ、燃料のよいディーゼル改良、ハイブリッド車や電気自動車、さらには燃料電池車の実用化に取り組んでいると強調。デザインが、車両のアップ化においてパッケージングや空力性能などで貢献し大きな役割を担っていると、その重要性を説いた。

【招待講演】「デザイン政策の変遷—制約の自覚と共生に向けて」



細野 哲弘 経済産業省製造産業局長

講演要旨)

国のものづくり政策にかかわる立場から、国のデザインとしての位置づけであった「輸出デザイン法」の成り立ちと同法律廃棄の日本のデザインの成熟化を紹介。グッドデザイン賞を創設した通産省（当時、現・経産省）の時代を経て、2008年度からサステナブル・デザイン賞を立ち上げ、大量生産・大量消費を促すだけでなく、「良いものを長く使う」という価値観と、デザインを人や都市、歴史の観点から考察するサステナブル・デザインの重要性を力説した。その中で、人を介した「もの」「感性＝心」のあり方を重視し、感性による創造の構築の推進を提案。日本の感性、伝統の素晴らしさを今後、今年にはNY、来年は上海万博で紹介することになっていると日本のものづくりの基礎をサステナブル・デザインで考える国の方向性を示した。

【招待講演】「持続可能な社会を目指して」



高遠 秀典 トヨタ自動車株式会社グローバルデザイン統括部担当部長

講演要旨)

Zeronize (事故などのネガティブをゼロに) & Maximize (楽しみや快適性などポジティブな点を最大限に) を高次元で両立させた「サステナブルモビリティ」の実現を目指す重要性の中で、それをいかにハイブリッドや燃料電池車の魅力を高めるデザインに到達させるかが目標と力説。これは、環境・エネルギー問題や交通事故、交通渋滞などクルマが社会に与えるネガティブインパクトを最小化「ゼロナイズ」と同時に、クルマの楽しさや快適性、利便性などポジティブインパクトを最大化「マキシマイズ」という考え方である。負担を「ゼロナイズ」する、そういう新たなデザインを発信していくことが使命と考える。それには日本人が元来持っている、自然、人、物を慈しむ心、「慈愛の心」をもってデザインしていくべきではないか、と同社が提唱する「J-factor」の意義を強調した。

【招待講演】「YAMAHA のグローバル戦略ーデザインがコミュニケーション」



川田 学 ヤマハ株式会社デザイン研究所所長

講演要旨)

ヤマハのデザイン哲学を、「Integrity (本質)」「Innovative (創造的)」「Aesthetic (美しいデザイン)」「Unobtrusive (でしゃばらないデザイン)」「Social Responsibility (社会的責任を果たすデザイン)」の5つであると紹介。その中で重要なのは、楽器が中心ではなくて、人がいて、始めて成り立つという哲学。そこには日本の古来の精神、美意識が介在する。人とももの関係には、「こころ」が潜在し、道具 (楽器) と人はパートナーシップで結ばれ、人生の良きパートナーであるということ。商品はおのずと長く使えば朽ちるが、使うと使うほど、価値が増すデザインこそが、サステナブル・デザインに通じ、そこには「愛する」という人の感性が見出されていると力説した。

【招待講演】「地球の感覚神経系をデザインする」



竹村 真一 京都造形芸術大学教授

講演要旨)

地球を人間と同様、一つの生命体としての捉え方から、いかに、地球を可視化するかがテーマであると考え。手塚治の話为例に、宇宙から地球をみることによって始めて地球の現状を客観視できるようになるのではないかと氏の考えから、地球にいても、地球を客観的に見えるようITやグラフィックアートを駆使して作った「触れる地球」を紹介。2002年にプロトタイプを初めて提案し、洞爺湖サミットでは展示を行ったことを説明。大きな意味でのデザインとは、地球をデザインすること。地球 Literacy を広めることが重要で、地球にいても地球を客観的に理解できることがポイント。「地球体の神経系」を活用して、ソーシャル・デザインが可能となり、等身大でコミュニケーションしながら（地球を実感しながら）世界の可視化が可能となってきたことを紹介した。

【トークライブ】



要旨)

サステイナブル・デザインとはどういうものか？というシンポジウムのメインテーマについて自由討議。人間の原点に戻って、伝統だけでなく、新しいものにも伝統を作る気概が必要であるとともに、機能主義や普遍主義偏重から、使いこむことで価値を持つというデザインのコンセプトこそが重要。そこには、物と人（心）の相互関係があり、それを考えることがサステイナブル・デザインにつながるのではないかと。サステイナビリティは、いまや世界の要請で、このような要請・条件を考慮しつつ、文化、技術、哲学を問わず広義における考察が重要という視点で一致した。

トークライブ後には、以下の「JAPAN サステイナブル・デザイン宣言」が採択され、以下を報告書に記すことで合意した。

今回のシンポジウムは日本初の試みで、サステイナブル・デザインの重要性を内外にアピールするもので、その方向性を示した重要な会議となって閉幕した。

「JAPAN サステイナブル・デザイン宣言」

①機能主義や普遍主義偏重から離脱し、都市や歴史、文化・伝統といった視野をあわせて物や社会を設計する。

②日本の自然や風土を礎とした技（わざ）を介在させたデザインで、「もの」と「心」を融合させる。

③文系、理系を橋渡しする新しい豊かな発想や哲学を生かしたデザインを目指す



講演者



講演風景



トークライブ風景



講演風景



講演風景

— シンポジウムに関する全国紙掲載記事 —

本シンポジウムは持続可能性における研究では新しい分野ですが、非常に重要な分野でもあることから、メディアの関心も高く、一連の記事が報道され、反響を得ました。

- ・日本経済新聞 2月4日付 朝刊(経済面)

持続可能なデザインシンポジウム
大阪大サステイナブルイニシアティブ
 ティ・サイエンス研究機構
 二十八日午後一時から、大阪府北区の阪大中之島センター(佐治敏三メモリアルホール)で「持続可能なデザインとは」をテーマにしたシンポジウムを開く。本日は技術研究所の海峽伸樹常務執行役員らが、経済成長と環境を両立する持続可能な社会の実現に必要なデザインについて講演、討論する。無料。申し込みはホームページ(http://www.riss.osaka-u.ac.jp)から。問い合わせは事務局(06・6879・4150)。

- ・朝日新聞 2月14日付 朝刊(社会面)

「持続可能なデザイン」
 大阪大学サステイナビリティ・サイエンス研究機構などは28日午後1時から、大阪府北区中之島4丁目の同大学中之島センターで、シンポジウム「持続可能なデザインとは」を開催する。自動車・オートバイメーカーのデザインチームらが集まり、旧来の機能性や普遍性重視ではなく、環境問題や歴史・伝統、安全性に配慮し、持続可能な社会を実現するデザインとは何かを考える。無料。先着200人。問い合わせは事務局(06・6879・4150)。

- ・毎日新聞 2月14日付 朝刊(経済面)

「持続可能なデザイン」を探る
 デザインやアートの視点から持続可能な社会への道筋を探るシンポジウム「持続可能なデザインとは」が、環境、安全安心、人や伝統からのアプローチ(大阪大学サステイナビリティ・サイエンス研究機構など主催、毎日新聞社共後援)が28日午後1時から、大阪府北区中之島の阪大中之島センターで開かれる。南條史生・森美術局長▽高橋秀典・トヨタ自動車グローバルデザイン統括部部長補佐▽海老澤伸樹・本田技術研究所常務執行役員▽川田学・ヤマハデザイン研究所長▽細野哲弘・経済産業省製造産業局長▽竹村真(06・6879・4150)。

一、京都造形芸術大学教授らが講演やシンポジウムで議論。20世紀のデザインが人や環境に快適さをもたらしたか、「21世紀の新しいデザインとは」について考える。

定員200人(先着順)、無料。問い合わせ、参加申し込みは同シンポジウム事務局(06・6879・4150)。

古びない魅力のある商品を開発し続けることで、最新技術を開発し続ける商品に次々買われ替える。本日は環境に優しいのはどちらか。2月28日、大阪府市、美術館、メーカーからパネリストが参加して開かれたシンポジウム「持続可能なデザインとは」(大阪大学サステイナビリティ・サイエンス研究機構など主催、朝日新聞社共後援)の議論を聞き、「持続可能な社会」のビジョンを共有する難しさをあらためて感じた。

「持続可能なデザインとは」は環境や資源、経済成長、開発などの問題を議論する際に重視されるキーワードだ。シンポジウムは様々な分野の専門家「持続可能な社会」を共有する共通の切り口としてデザインがテーマになった。

森美術局長の講演は、デザインが古びない商品は長く使われ続けることになる。結果的に環境への負荷を減らすことができる。と述べ、デザインは「持続可能性」を追求すべきだと主張した。また、人々は商品を選ぶ際にデザインを重視しており、企業は環境に配慮した商品にこそ最高のデザインを与えるべきだと主張した。

経済産業省でもこの政策にかかわる細野弘・製造産業局長も、企業は大規模な大量消費を促さなければ、良いものを長く使っていく価値観も持たなければいけないと指摘。また、楽器「音響メーター」のヤマハから参

「良いものを長く」か
 シンポ「持続可能なデザインとは」
 「新技術で負担減」か



活発な議論が交わされた「持続可能なデザインとは」シンポジウム。2月28日、大阪府北区、伊ヶ崎撮影

加した川田学・デザイン研究所長「デザイン面の取り組を報告し、一多くの商品は古くはなれば価値が下がっていくが、我々は人生のパートナーとして長く使ってもらえ、使い込まれることで価値が上がっていく製品をこそつくりたい」と語った。

一方、自動車メーカーからは朝の視点が提示された。本田技術研究所の海老澤伸樹・常務執行役員は、最近発売されたハイブリッド車に、燃費を抑える走り方をセンサーで検知できる機能を持たせたり、自動車を新しい車に乗り換えることで、大気汚染や二酸化炭素の排出を抑えるというものも「21世紀の新しいデザイン」として期待されている。政治、考え方など議論したトヨタ自動車グローバルデザイン統括部の高橋秀典・担当部長も、ハイブリッド車や低燃費車の魅力を高めて

デザイン面の取り組を報告し、一多くの商品は古くはなれば価値が下がっていくが、我々は人生のパートナーとして長く使ってもらえ、使い込まれることで価値が上がっていく製品をこそつくりたい」と語った。

一方、自動車メーカーからは朝の視点が提示された。本田技術研究所の海老澤伸樹・常務執行役員は、最近発売されたハイブリッド車に、燃費を抑える走り方をセンサーで検知できる機能を持たせたり、自動車を新しい車に乗り換えることで、大気汚染や二酸化炭素の排出を抑えるというものも「21世紀の新しいデザイン」として期待されている。政治、考え方など議論したトヨタ自動車グローバルデザイン統括部の高橋秀典・担当部長も、ハイブリッド車や低燃費車の魅力を高めて

- ・朝日新聞 3月5日付 夕刊